

【ポスター発表】

大学コミュニティにおける自殺予防研究・実践の動向と課題

— 海外の研究動向を中心として —

○ 関西学院大学 氏名 市瀬晶子 (7583)

キーワード3つ：大学コミュニティ 自殺予防 研究動向

1. 研究目的

大学におけるこれまでの自殺予防対策は、自殺の危険性のある学生を早期に発見し、専門機関や精神医療につなげ、自殺のリスクの軽減を図るという個人の治療に介入の焦点をあてた医学モデルのアプローチが主であった。医学モデルでの自殺予防対策の中心となるのは各大学の相談機関であるが、国立大学を対象とした内田（2010）の調査では、1985年度から2005年度の21年間で、自殺者に占める保健管理センターの関与した率は19.3%であり、自殺学生に対する大学の保健管理センターの関与率が低いことが指摘されている（内田 2010:550）。この背景には、学生が支援を必要とする状態であったとしても相談機関に助けを求めようとしない状況があることが伺え、大学生の自殺予防は従来の医学モデルのアプローチのみでは限界がある。そこで、本発表では、海外における研究・実践の動向を探り、大学コミュニティにおける自殺予防研究・実践の課題を検討したい。

2. 研究の視点および方法

EBSCO-Host データベースにおいて“suicide prevention”と“campus”，“college”“university”をタイトルに含む文献の検索を行ったところ、61件の文献が該当した。そのうち重複する論文、定期刊行物、レポート等論文ではないものを除く44件のうち、国内に所蔵のない文献と学位論文を除く、計26件の論文のレビューを行った。

表1 レビューの対象文献

キーワード	検索結果	分析対象
“suicide prevention” and “campus”	24	13
“suicide prevention” and “college”	21	8
“suicide prevention” and “university”	16	5
合計	61	26

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会の「研究倫理指針」にもとづき、先行業績の検討に際しては自説と他説の峻別を明確にし、引用元を明示する。

4. 研究結果

主な研究動向	文献
新しいアプローチ・概念の提示	Jodoin & Robertson (2013), Drum & Denmark (2012)
ゲートキーパーの養成とその効果評価	Wallack & et. als. (2013), Indelicato & et.als. (2011), Mitchell & et.als. (2013) Pasco & et.als (2012), Tompkins & Witt (2009), Taub & et.als. (2013)
ピア教育者の養成	Catanzarite & Robinson (2013)
学生の多様性に特化したアプローチの開発	Shadick & Akhter (2013), Shadick & Akhter (2014), Muehlenkamp et. als. (2009)
自殺予防の管理・運営	Washburn & Mandrusiak (2010), Trimble (1990)
連携、コミュニティの形成	Kaslow et. als. (2012), Funderburk & Archer (1989)
自殺予防でのメディアの課題	Crane & et.als. (2005)
科学技術を用いた自殺予防	Manning & VanDeusen (2011)

5. 考察

文献レビューの結果に見られた最も顕著な傾向は、1) ゲートキーパーの養成とその効果評価の研究であった。いずれも研究者自身が所属する大学での実践事例をもとに、養成プログラムの開発から実践、評価までの5段階の計画が提示されたり (Wallack & et. als. 2013)、養成教育の効果評価が行われていた (Wallack & et. als 2013; Indelicato & et.als. 2011; Mitchell & et.als. 2013; Pasco & et.als 2012; Tompkins & Witt 2009; Taub & et.als. 2013)。また、2) 伝統的なメディカルモデルを越えた新しいアプローチを提示している研究も見られた。個人だけでなく、コミュニティ、組織のレベルでも課題に取り組む公衆衛生アプローチの提示 (Jodoin & Robertson 2013)、問題に焦点をあてたパラダイムと臨床的介入のパラダイムをつなぎ、自殺予防介入の連続性が概念化されていた (Drum & Denmark 2012)。また、3) 大学コミュニティの多様性を認識した、さまざまなマイノリティグループの学生に特化した自殺予防のアプローチも示されていた (Shadick & Akhter 2013, 2014; Muehlenkamp et. als. 2009)。日本においても学生のピアサポートの養成が取り組まれているものの広がりを見せておらず、海外での研究・実践との違いとして、ピア教育者やゲートキーパーの養成とともに、それを支える自殺予防の新しいパラダイムの理論的枠組みや大学のコミュニティそのものを自殺予防に向けて形成していくことが課題ではないかと考えられる。

【主要参考文献】

内田千代子(2010) 「21年間の調査からみた大学生の自殺の特徴と危険因子—予防への手がかりを探る—『精神神経学雑誌』112,(6), 543-560.